巻頭言

終わり始まり

TSUNEMITSU Hiroshi
ウイルス病研究チーム　チーム長　恒光　裕

アジア養豚獣医学会（APVS）2009が終了した。2009年10月26～28日、つくば国際会議場に約1200名が参加した3日間の集会は、一瞬の風のように過ぎ去っていった。実行委員会が発足したのが約4年前。大会の準備と運営に沢山の人達がかかわり、そして当日には大勢の人が参加した。当初の参加予定者は500名だったので、実に2倍以上の参加である。

世界の豚の6割はアジアで飼養され、アジア養豚は更なる発展拡大している。日本を含むこれらの国々では一戸当たりの飼養規模拡大が急速に進んでいるが、規模拡大による効率生産を図る上でも疾病対策が重要な課題となっている。このような背景の中、APVSはアジアにおける養豚産業の持続的発展に向かって獣医学を基軸に貢献する学会として、生産現場の最前線にかかわる研究成果の発表や情報共有を目的に設立された。越境性/新興感染病の制御はアジア地域が一丸となって取り組むべき課題である。また、衛生管理や飼養管理の技術的向上、飼料資源や遺伝資源の確保などアジア地域の養豚関係者が連携して解決すべき問題は山積している。APVSは養豚研究者だけでなく、獣医師、生産者、行政・企業・団体関係者など養豚産業にかかわる様々な人達が参画するインターセクショナルな学会を目指している。このような学会は他に類をみないと思われる。

大変盛大な学会であった。これがアジアンパワーというものなのか。しかし、会場に立ちこめたむんむんとした熱気は、海外参加者から発せられたものだけではなかった。多くの日本人参加者からも養豚への熱き思いがひしひしと伝わってきた。今置かれている日本の養豚産業は豚価の低迷などによって決してよい状況ではない。だからこそ、同じ産業にかかわっている人達の危機感が、生き残りのためにはインターセクショナルに関係者一丸となってみんなで頑張っていかねばならないという思いに転化し、連帯感・一体感のような雰囲気となって伝わってきた。この産業にかかわっていられて嬉しいと思った。

今回の学会で最も多く発表された演題は、豚サーコウイルス関連疾病についてであった。動衛研近辺の農場で突如認められた病気がアジアの別の国々で同じ時期から認められ、ワクチン接種によって同じ効果が確認されていた。地域、国境、風土を越えて同じ状況がほぼ同時進行で起きていたことに改めて驚いた。ここは同じアジアの一国なのである。

生産者の方々から学会レセプション用に大量の豚肉をご寄付いただいた。感謝感激とともに、豚しゃぶやローストポークなどに調理されてレセプション会場であるホテルグランド東雲に溢れかえった大勢の人達の胃袋に収まった。豚肉のご提供は、生産現場で立ちはだかっている衛生問題の解決に向けた試験研究への期待の表れでもある。ある生産者は、自らの生き残りのためには衛生・疾病対策の見直し検討を行うことが今最も大切であると話されていた。ここでも熱い思いが伝わってきた。われわれの生き残りにおいても自ずとその方向は明確である。また、目的達成には沢山の人達とのかかわりが時に必要であり、そのことが家畜衛生研究の醍醐味の一つである。

学会直前の最も多忙な時期になって体調を少し壊してしまい、他の多くの実行委員の方々に色々とご迷惑をおかけしてしまった。しかし、APVSに参加された多くの方々から元気を沢山頂戴させていただいた。人生日々感謝である。なお、次回のAPVSは2011年にタイのパタヤで開催される。タイの次はベトナムである。